

二つの<秋の歌>

① ポール-ピエール・ボードレール (1821~67)

「秋の歌 I」(試訳)

やがてボクたちは沈むだろう、寒い、暗やみのなかへ；
さらばだ、あまりにも短かったわれらの夏の眩^{まばゆ}さよ！
ボクにはもう聞こえる、暗い響きを立てて
中庭の敷石に薪が落される音が。

冬はすっかりボクの暮らしに入り込んでくる：怒りが、
憎しみが、悪寒が、慄^{おの}きが、辛い嫌な労働が。
そして北極の地獄の太陽のように、
ボクの心臓^{こころ}は赤く凍りついた石塊にすぎなくなるのだろう。

木の葉のように震えながら、薪の木が一つ一つ落ちるのをボクは聞く；
打ち付ける死刑台の音もこれほどに重く応えるだろうか。
ボクの問題は打ち潰される塔に似て
執^{しつ}こく繰り返される重たい破城槌^{はじょうつち}の攻撃に耐えている。

この単調な響きにあやされていると、
あの音はどこかで誰かが大急ぎで棺^{ひつぎ}に釘を打っているように聞こえる。
誰の棺？—昨日の夏のため：いまは秋だ！
この不気味な雑音が、旅立ちを告げているようだ。

② ポール-マリー・ヴェルレーヌ

「秋の歌」(試訳)

うらがなくく咽び泣く

ヴァイオリン

秋が掻き鳴らす

物憂く長く

私の心臓^{こころ}を痛みつけ

力なく単調に

こんなにも息苦しく

蒼ざめてしまった そのとき

鐘が鳴り

過ぎ去った あの

日々を思い出し

思わず涙する

私はもはや

悪戯^{いたづら}好きな

風にまかせて

あちらへ またこちらへ

運ばれて行く

枯葉のよう

「落ち葉」(上田敏訳『海潮音』より)

秋の日の

ヴィオロンの

ためいきの

身にしみて

ひたぶるに

うら悲し。

鐘のおとに

胸ふたぎ

色かえて

涙ぐむ

過ぎし日の

おもひでや。

げにわれは

うらぶれて

こゝかしこ

さだめなく

とび散らふ

落葉かな。